

街の歴史（ベトナム歩道 第6回）

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	236
ページ	42-42
発行年	2015-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003215

連載 ベトナム歩道

二〇一四年八月、ベトナム南部のメコンデルタ地域の調査に出る前の日のこと。歯磨き粉など調査行に使う生活用品を調達するために少し外出した。それまで仕事場との往復が主で、自宅周辺を歩く機会はほとんどなかった。

ホーチミン市三区内の拙宅を出て左に折れ、リー・ターイ・トー通りに向かって一方通行のグエン・ティン・チエウ通りをカクマンタムタム（八月革命）通りの方向に歩いてみる。額に汗が浮かび、すぐにシャツが湿り出す。衣料品店、アパート、各種料理屋、靴屋などが並ぶ区域を抜けて交通量の多いカクマンタムタム通りの辺りまで来ると、右手に座禅を組む大きな僧の像があった。像の背後には炎が燃え盛っているように見える。何だろうと思いつ、通りを横切って、公園区画に入ってみると、入口部分に碑文が刻まれていた。

宗教的差別、仏教弾圧を行う南ベトナム政府のゴ・ティン・ジエム政権（当時）に対し、仏教弾圧、テロを止めるよう要求し、僧侶クアン・ドウック（俗名ラム・ヴァン・トゥック、一八九七〜一九六三年）が、一九六三年六月一日にファン・ティン・フン通りとレー・ヴァン・ズエット通り（現在のグエン・ティン・チエウ通りとカクマンタムタム通り）の十字路で焼身を遂げた。同僧の行いは国内外の世論を喚起し、反ジエム政権闘争の推進に貢献した。仏教、平和、民族独立、祖国統一のために同僧が払った犠牲、功績と徳行に対する恩に報いるため、ホーチミン市が像を建立したとある。振り返ると、カクマンタムタム通りを挟んだ対面の十字路角にも、同僧を弔う塔が建てられていた。

筆者は、事件の概要についてかつて学んでは

いたものの、現場が自身の住む区域の傍にあることをこの時初めて知った。

カクマンタムタム通りを渡り、さらにグエン・ティン・チエウ通りを進む。仏教書籍の店、おもちゃ屋など、各種店舗が並ぶエリアを少し歩くと、多くの人が集まる所に出た。右手方向と左手方向とは、やや趣が異なってみえる。右手方向にある小道にまぎれ入ってみると、小道の両側にブーン（餅米麺）やミー（小麦粉麺）などの麺料理、ベトナムスイーツの代名詞チエーやパイヤ、マンゴー、スイカなどのカットフルーツ、焼き菓子など、さまざまな商品を販売する人達や買い物客で賑わっていた。また、小道沿いにはヴオンチュオイ（バナナ園）市場があった。

店が途切れる辺りまで小道を歩いて引き返し、次は、リー・ターイ・トー通りに向かって左手側のエリアに向かう。入口角の店にはバナナ屋さんがあり、メコンデルタやダラット産のバナナを売っていた。通り沿いにある方屋に入り、歯磨き粉を購入する。椰子の実でも飲むと歩き続けていると、グエン・ティン・チエウ通りから、ヴォー・ヴァン・タン通りに抜けようという辺りで、周囲の建物と雰囲気異なる硬質な建物があった。隣にある黄色地に赤字の看板を据えた喫茶店とは対照的な趣である。

建物内に首を入れてなかを覗いてみると、若いベトナム人女性が立っている。先客（欧米の中年夫婦）がいるようだ。自分も入っていいかを確認してなかに入ってみた。基本的に二階建ての同建物内には天井裏、床下にも使用スペースがあった。二階に上がってみた後、下に降りて床下の隠し蓋をずらし、階段を数段降りると、AK銃、短銃、ロケット弾、手榴弾、弾丸など

が多数並び、積まれていた。

一九六八年の旧正月（テト）に南ベトナム全土で展開されたテト攻勢の際、南ベトナム政府の中核である独立宮殿を攻撃するため、果物カゴの下に隠すなど、さまざまな方法により密かに武器がこの地下室に運び込まれた。攻勢決行を前にして、カンボジアの隣に位置するタイニン省で訓練を積んだ一五人の兵士がこの場に集まった。武器を手にした兵士達は事前の計画に基づいて独立宮殿に対する攻撃を行ったものの、反撃を受け、援軍もなく、生き残った兵士も捕縛されてしまった。

しかし、テト攻勢は南ベトナム政府を支援するアメリカ政府、そしてアメリカ国民に心理的な動揺を与え、その後のベトナム戦争の情勢にボデイブローのような影響を与えることになる。ベトナム戦争の時代、北緯一七度線以北は米軍による空爆に晒され、以南は解放勢力・北ベトナム軍と南ベトナム軍・米軍が、直接手を交える地域であった。

予期せぬ形で自身が暮らす街の歴史の一端に接した筆者は、数年前に実施したベトナム中部北緯一七度線以南に位置するクアンチン省での調査の際、父親が兵に殺害された現場の家で今もなお暮らす女性に、そのご自宅でお会いしたことを思い出した。お話をうかがっている最中にそのことに自ら触れた女性は、こらえようと揺れる臉から涙を零した。

二〇一五年四月三〇日、ベトナムはベトナム戦争後四〇周年を迎えた。戦争のない平和な時代となり、着実に経済発展を遂げる現在のベトナムも、かつて戦争、紛争の地であった。（つらもと みのる／アジア経済研究所 前ベトナム海外研究員）